

## 全日中事務局だより

▼四月三十日からG7首脳会議を前に、グローバルサウスとの関係を強化するため岸田首相がアフリカを訪問した。その最初の訪問国がエジプトであったことは記憶に新しい。

▼そのエジプトでは、三十日の夕刻、エル・シーシ大統領との会談の後、首相主催のレセプションがシエラトン・カイロ・ホテルで開催された。席上、「EJS「エジプト ジャパン スクール」



による文化・教育面での両国関係のさらなる強化を期待する旨の話があった。

▼このEJSとはどんな学校なのか。

▼これまでエジプトでは、学力偏重の詰め込み型教育が一般的で、保護者もそうした教育を望んでいた。教師の多くは高圧的で、知識を教えるだけの一方通行の授業が展開されていた。

▼さらに、人口増加に伴う学校不足から一クラスに七〇〜八〇人もの児童・生徒が詰め込まれることもあり、学びにくい環境だった。

▼そこで、学力だけでなく主体性、協調性、社会性などが身に付く日本式教育に注目していたエル・シーシ大統領は日本に協力を要請した。

▼二〇一六年二月、大統領来日時に当時の安倍首相と「エジプト・日本教育パートナーシップ (EJED)」を締結し、就学前教育から高等教育に至るまで日本式教育の特徴を生かした包括的な協力をを行うことで合意した。

▼特に「特活 (Tokkatsu)」の導入の協力を日本に要請し、EJSは二〇一八年に開校した。現在は、エジプト全国に約五〇校のEJSがあり、将来的には二〇〇校まで増やす計画もあると聞いている。

▼先行して学級会などの活動を試験導入していた二つの公立小学校に加え、二〇一六年九月には更に一〇校でスタート。二〇一八年九〜一〇月には、日本式の活動を取り入れ、施設・備品面でも「教室の広さは六四平方メートルとする」「移動が容易な学校家具(机や椅子)を備える」といったガイドラインに沿って造られた公立校として、三五の新設EJSが開校した。

▼エジプトでは今後も日本式教育の導入を広く進める方針で、日本はその実現に向け円借款での資金支援も行っている。

▼本会、川越豊彦第四三代会長は、この日本式教育をエジプト国内で普及・

充実させるため、これまで日本人スーパーバイザーとして、スエズ運河の近くにあるEJSで勤務されていた。今回、その貢献に対してレセプションに招待されたとのメールが届いた。

▼岸田首相のスピーチの冒頭でEJEPに触れ、その中でEJSプロジェクトに



大変期待していると話をいただいた。

▼川越元会長は、六月以降は、EJSを離れて、エジプト教育省内のPMU (Project Management Unit・EJSを統括している部署)でEJS全体の教育活動の充実・発展のために活躍されている。

(二枚の写真とも、川越元会長から提供)

▼現地のEJSは、教職員も子供もすべてエジプト人であるが、日本人のスーパーバイザーの指導・助言をもとに日本式教育を実践している。

▼また、エジプト教育・技術教育省は「エデュケーション2030」と呼ばれる教育改革の一環として、二〇一八年九月から全国約一万八、〇〇〇の小学校に適用された一年生の新カリキュラムに学級会、学級指導、日直の三点からなる「ミニ特活」を導入した。「特活」を日本以外の国で全国規模により導入したのは、エジプトが世界初の事例だといわれている。

▼現在、EJSでは「日直」と「清掃」も導入されている。「日直」は「Leader (リーダー)」と名前を変えて親しまれているようだ。リーダーは整列するときには先頭に立ち、他の子供たちを整列するように促したり、授業の開始と終了時には、教室の前に立って挨拶を行っている。

▼日本ではごく当たり前の光景が、エジプトでは革新的であり画期的だという評価を与えられている。日本の教育の課題が話題になることが多いが、日本型教育もまんざら捨てたもんじゃなれないと感じたのは、私だけだろうか。

会員計報

富山県富山市立上滝中学校長  
前田隆史様 五十一歳 五月六日

謹んでお悔やみ申し上げます、御冥福をお祈り申し上げます。

(事務局長 富士道正尋)